

桜蔭俳話会 十二月句会 (第三四一回)

平成二十七年十二月二十日(日)

会場 旭区民文化センター(サンハート)

- 5点④十二月八日Gパンてふ日常着 才美
- 3点①雪女郎着たくはないか江戸小紋 明美
- 3点①病む人へ冬青空をとつておく 才美
- 3点①揚げたてが走つて来るよ牡蠣フライ 朋子
- 3点 断捨離の言葉に揺るる年の果 弘子
- 2点①水澱むところに一つ鴨の陣 守
- 2点①小春日の占ひコーナー客一人 明美
- 2点①奈良筆の雪の音して万葉歌 才美
- 2点 寒禽やあけぼの杉の雨晴れて 朋子
- 2点 水仙やちりちりと鳴る空の紺 朋子
- 2点 黄落の並木ぞ見ごろ昨夜の風 弘子
- 2点 文字太き消息とどく遠嶺雪 秀一
- 1点 天上の言葉預かり小白鳥 守
- 1点 そばだてて霜夜の耳となりし猫 才美
- 1点 晦日蕎麦細く長くの願込め 眞壽
- 1点 お散歩の保母うしろ向き冬うらら 弘子
- 1点 枯菊のかそけし音も刈りにけり 弘子
- 1点 鬼柚子や朝日がいっぱい丘の家 ヤエ子
- 1点 里便り白菜包む新聞紙 かおる
- 1点 大楳をぐいと転がす鉄の鉤 守
- 1点 柚子浮かぶ湯煙り薫る露天風呂 眞壽
- 1点 冬空やゲツテルフォンケン歌いおさめ かおる
- 1点 小春日や車椅子の子の管つけし ヤエ子
- 1点 風呂吹やグルメの店とは縁遠く 秀一
- 1点 只一つ積れる雪に熟し柿 眞壽
- 1点 水温の冷たさを浴ぶ泥野菜 明美
- 1点 風に乗り木の葉踊るや夜半の月 邦子
- 1点 柚道に廃家の多し柿たわわ 幸
- 1点 ポートみな船底見せし冬の潮 幸
- 1点 氷の眼の帝のありて兵馬俑 幸

※

- 魚目覚む水族館の冬花火 明美
- 悔ゆることのみ多くして年暮るる 邦子
- 人任せ老いて肯ふ冬木の芽 秀一

- 凍雲や土鍋に睨む鯛のかほ 朋子
- 軒下に新芽のありしシクラメン かおる
- 明け切らぬ高野宿坊冬の霧 守
- 暮易しうすうす湯気のとろ火鍋 秀一
- 絶叫は花やしきより冬うらら 朋子
- 来る年の愉しさ願ひ日記買ふ 邦子
- 朝日出て枯枝赤く染めあげぬ ヤエ子
- 冬帽子大いちょうみあげ初句会 かおる
- 願はくば都会の汚れ雪よ消せ 眞壽
- 立話し色とりどりの毛糸帽 邦子
- 焼いもを二つに割りし笑顔かな 秀一
- 室咲きの花買ひ足して人と逢ふ 朋子
- 冬滝は僅かに水が流れ落ち 眞壽
- 叱られて言ひ訳長き寒暮かな 明美
- 片隅の片付かぬ物冬座敷 弘子
- 車窓から凜とした富士冬深し 邦子
- 冬構セキュリティホール塞ぎけり 守
- 枯土手や密やかに咲くピンクの花 ヤエ子
- 冬の朝陽の匂ひの机カバー かおる
- 児を乗せて自転車疾走霜の朝 ヤエ子
- 晩秋や書棚の史書に眼をこらす 幸
- 短日や喪中の葉書二枚あり 幸

(不在投句 古野明美)

「事務局からお知らせ」

○一月の食事会と句会

(食事会) 一月二十四日(日)正午から二俣川駅
ライフ四階の「仕立屋」で。正午少し前
にお出で下さい。

(句会) 食事会終了後、一時から、五階の旭区民
文化センター・サンハートで行います。

○通信句会投句

締切り・二月十日。一月中に投句用葉書を送り
ます。

○三月句会

三月二十七日(日)、午後一時から、旭区民文
化センター・サンハートで行います。